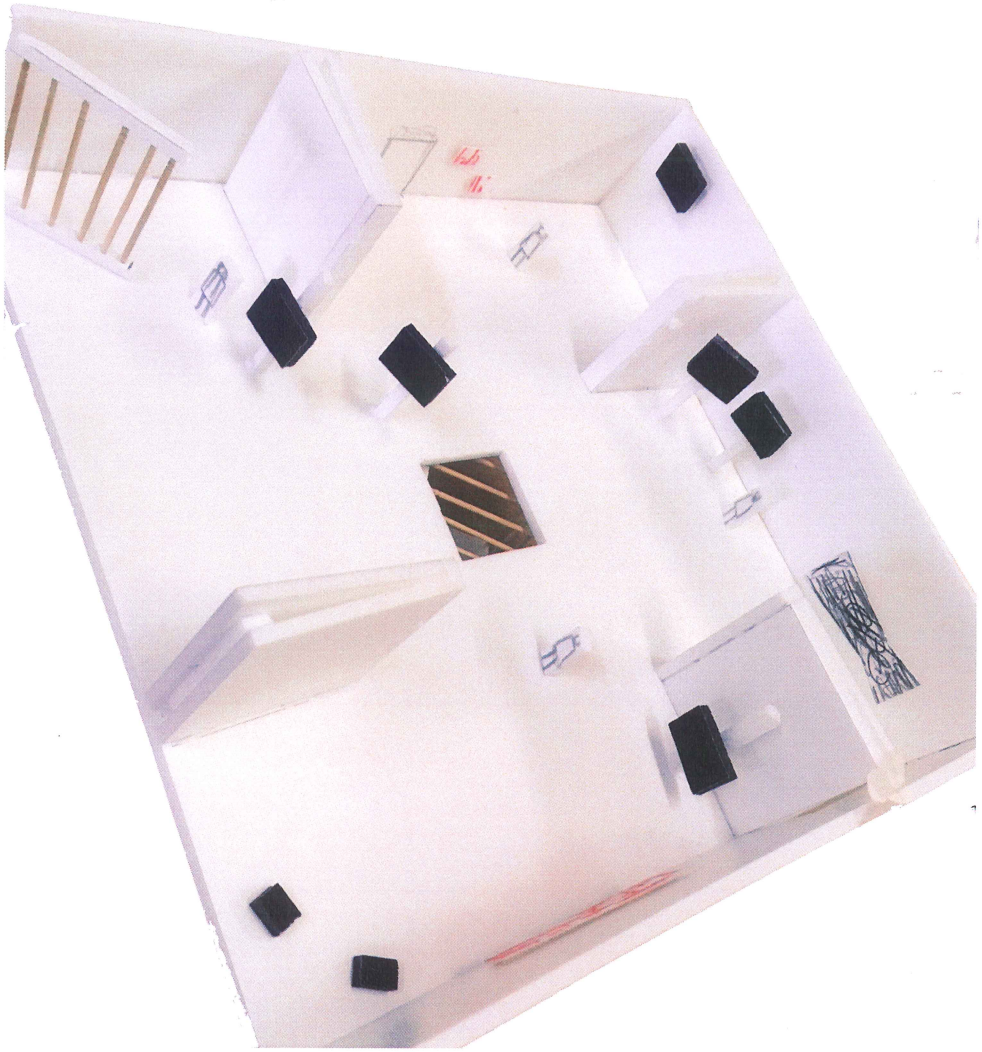
第 58 回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展
日本館キュレーター指名コンペティション
企画提案



展覧会名：生命の展示に向かって　verso le esposizioni vitali
出品作家：白川昌生

2018 年 5 月

企画提案者：金井直（信州大学人文学部）

展覧会の基本構想（コンセプト）

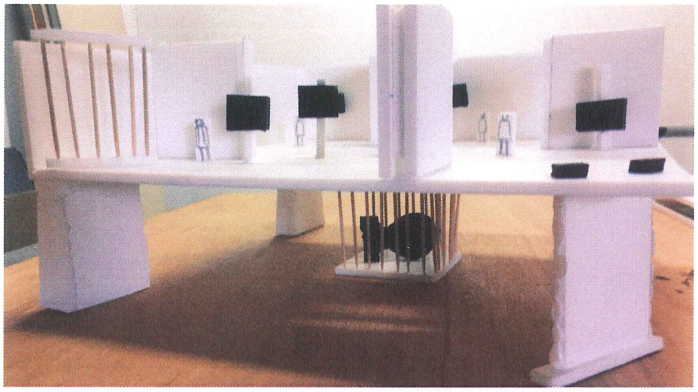
動物園と美術館。遊園地とも結びつきがちな前者と、図書館の続きのような後者。さまざまな音やにおいに満ちた屋外施設と、静かで無菌的な建築。両者の標準・一般的なイメージは大いに異なるが、じっさいには同じ博物館系施設である。つまり、動物園と美術館は展示＝露出（エキシビション）・拘束（規律）・保存（ケア-キュア）の場所として近似であり、それに関わる観客や職員の類型、行動や心的条件も相似的である。さらに今日では、行動展示や生態的展示に代表されるような来訪者の経験や動物の生態を重視する動物園の姿勢・活動を、美術館が追う状況も認められる。それはまた、関係性、日常性、社会性へと関心を向ける現代美術の動向とも重なる現象である。

本展示は、現代の動物園と美術館の照応や接近、交差を、映像や絵画、立体を通して、あらためて説きおこすものである。その総体＝インスタレーションは、制度論的な観点において、現代の展示活動の長所・特徴のみならず、問題や陥穽をもあぶり出すだろう。同時に、そうした批評的視座を越えて、展示空間のなかでイメージの自由な布置・接触・連想・置換をくりかえし引きおこしながら、あわせて、動物-ヒトの境域を問いつつ、全体として、芸術実践が広く担うべき想像力の次元、総合性の回復を示すアトラス、「生命の展示」となる。その総合性は、かつてハラルト・ゼーマン（1933-2005）が提唱した「総合芸術作品 Gesamtkunstwerk」の理念をかすめながら、また、動物園と精神科施設の類縁に関するアンリ・F・エランベルジェ（1905-1993）の分析を経由して、精神活動についての横断的なアプローチの可能性を示唆するものである。

加えて、本展示が試みる動物園的なものの参照は、ジャルディーニがビエンナーレ以前に担っていた機能、場所の記憶をも喚起する。19 世紀当時、この地はより大衆的な遊興娯楽の空間であり（バッカス祭、夕涼み、花火、曲芸、気球、イルミネーション、富くじ、自転車競走）、象、馬、ロバなどの動物にふれる機会・場所もあった。総じて自律的な芸術世界とは無縁の、都市の周縁だったのである。とすれば、近年のヴェネツィア・ビエンナーレが向かう脱領域性や脱中心性、異種混交性には、現代美術全般の共通傾向のみならず、じつはジャルディーニの過去の痕跡をなぞる考古学、一種のアナクロニーという側面も認められよう。本展示はそうしたマイクロヒストリーに呼びかける試み、ローカルなものの復権でもある。

一方、ピロティ部分には、長崎型原子爆弾“ファットマン”のモックアップを設置する。1952年の主権回復以来、くりかえされてきた日本国のビエンナーレ参加。その舞台下に、終わらない戦後のしるしを横たえる。その擬人化された塊は、言わばマイナスのタイムカプセルとして、その瞬間の地上の営みを抹消し、さらに不可視と忘却を引き寄せてきた。その“うえ”で、我々はこれまでなにを見せてきたのか。このたびは、なにを見せうるのか。白川は、戦後日本社会の不定と脆弱のひとつのしるしをピロティに投ずることで、自らの“メインフロア”をもまた問い直してみせる。

同時にこの呈示は、ファットマンのそもそもの投下予定地である小倉、そこにあった動物園（到津遊園）に、戦後、通い親しんだ白川のライフヒストリーとも交差していくものである（1945年8月当時、白川の父は小倉にいた）。失われた多くの生命と、与えられた自らの生。そして到津の動物たち。史実と幼少期の記憶の重なりが、白川にとっての動物園を、生を謳い確かめるための特別な場所に変えていく。その個としての実感こそが、「生命の展示に向かって」パヴィリオン全体の舵を支えているのである。



出品作家の選定理由

上記のような総合的・重層的な展示を実現するには、白川昌生のような経験と学知、そして造形力、交感力を具備した芸術家の存在が不可欠である。

周知のとおり、ヴェネツィア・ビエンナーレは百年超の歴史を有する。それは、ときどきの時代の潮流を示すのみならず、近現代の芸術と社会の関係を絶えず映し、刻んできた。その蓄積に対して、いかなる応答が可能か。こうした

問題意識をもつとき、日本の現代美術の最新傾向を紹介することや、日本にほぼ暗黙裡に割り当てられる本質主義的な特徴を強調することは、とくに重要にも思われない。そうしたアヒストリカルな志向よりも、むしろ同時代史を見据え、またそれとともに歩んできた芸術家の存在に向き合いたい。それゆえの、白川昌生である。

白川昌生は日本国内のアカデミスムやアカデミスム化された前衛をその出自とはしない。芸術と社会が緊密な関係をもった70年代のヨーロッパで芸術と出会い、その脱領域性と総合性を体得した作家である。重要なのは、その滞欧経験を特権化・絶対化することなく、帰国後は地方都市での活動、ひとびととの関わりをこまやかに織りなしながら、関係性、協働、包摂、非専門化といった観点・態度の可能性を、実践的に呈示しつづけたことである。その活動は――当時の日本の美術界でどう捉えられていたかはともかく――振り返ってみれば、世界史的な次元と紛うことなく接続していた。

「技能的実践家としてのアーティスト」として、白川は、芸術を「表現と意味と受容の解体と生成の中を生き抜いてみせるという点において、個人・集団への優れた批判と治療になりうる活動・行為」とみなす。白川のそうした覚知をもってはじめて、スペクタクル化を逃れる総合と創造の共在、さまざまなコスモロジーの横断・共振の場が、パヴィリオン内に開かれるのである。

展示プラン

○メインフロア

彫刻（檻状の構造物）約450×320×40cm　1点

オブジェクト（剥製他）　テーブル（天板寸法90×180cm、2台）上に展示

映像（美術館・動物園の展示・人・場を対称的に捉える作品）モニター80インチ相当、6台

絵画（展示のコンセプトを示唆するダイアグラム）約140×370cm、2点

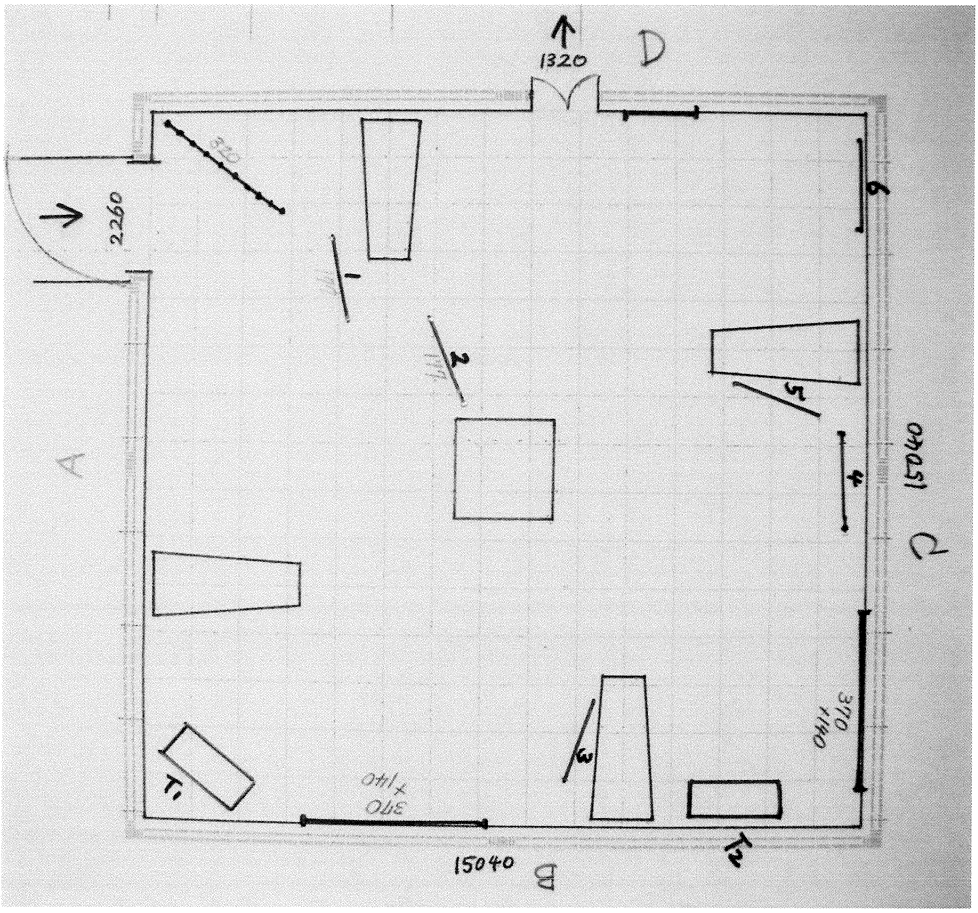
絵画　約140×140cm、2点

会場全体は自然光。仮設壁等の追加はおこなわない。入口から檻状の構造物にそって内部へ。段階的にせり上がって設置される6台のモニターによって、視線はしだいに高められ、緩やかに旋回する動線が、静的な既存空間に抑揚を与える。前半は現代の動物園を物語る展示。行動展示や生態的展示の様子やそれに関わる人々の姿を、白川の視点で

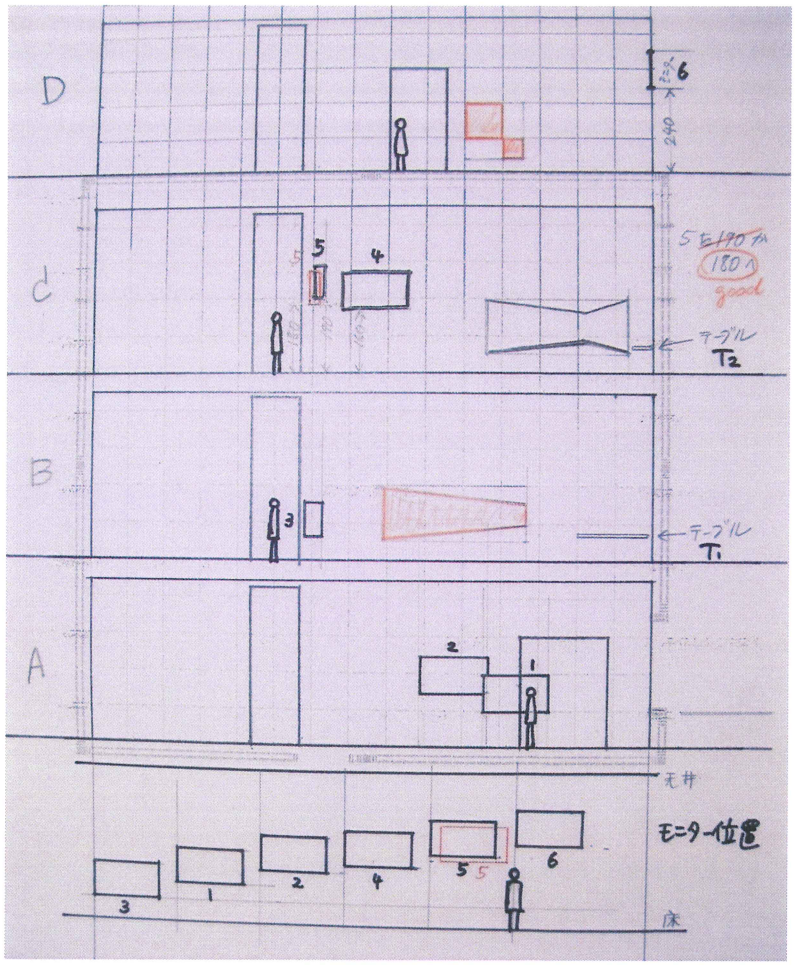
捉えた映像が並ぶ。剥製等のオブジェクトの傍らには、白川独自のダイアグラム絵画が掲げられ、動物園の特性が描写・拡張されていく。後半は現代の美術館。ワークショップ、参加型アートなどが、白川自身によって“模倣”される映像。モニターのあいだにはオブジェクト（彫刻）や絵画が並べられ、美術館らしさが“再演”されていく。
以上のプランを基本としつつ、じっさいの展示では、絵画・オブジェクト類の数・種類・設置位置は、必要に応じて（可能な範囲で）変更される。

〇ピロティ
彫刻（長崎型原子爆弾模型）152×152×360cm　1点
彫刻（檻状の構造物）約 370×500×500cm　1点

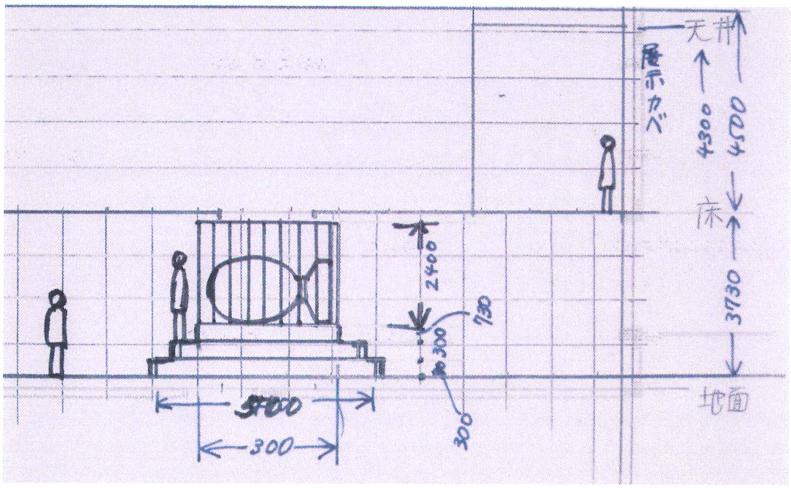
〇レファレンスコーナー
作家の著述・旧作資料（英訳・伊訳を用意）を紹介することで、メインフロアとピロティの展示作品の関係を示唆する。設置位置は現地において調整。



メインフロア平面図
1～6 はモニター位置



メインフロア側面図



ピロティ側面図

関連企画：アウトリーチ事業

ヴェネツィア市内の大学を会場とするトークインや地域コミュニティとのワークショップ等の機会を設け、ジャルディーニを越えた交流事業を展開する。

出品作家略歴

《無人駅での行為（群馬と食）》２０００年

白川昌生（しらかわ よしお）　1948 年生まれ。1970 年代にフランスおよびドイツで哲学と美術を学ぶ。国立デュッセルドルフ美術大学マイスター。1983 年に帰国。以来、群馬を拠点に、地方性、周縁性、マイナー性をあえて徹底的に引き受けながら、支配的な現代美術の動向や言説、中央の論理とは別の、地域の歴史・文化・経済と直結する活動、例えば「場所・群馬」（1993–）を実践。今日の多文化主義的な、社会的参与を重視する芸術動向を先取する。また現代美術史に関する研究・著作も多く、優勢な歴史観や規範に対する批判・再検討を絶えず展開している。一方、個別の作品・展示は、日常的な素材・映像を多く用いつつ、かたち・色彩・空間の配置・構成において軽やかかつ精確。芸術の魅力や可能性を開き、問い続ける優れた実践者である。

主な個展

1994 年「SHIRAKAWA’94 日本美術試作—日本人ですか 1」佐賀町エキジビットスペース（東京）

1996 年「日本人ですか 3」モリス・ギャラリー（東京）、ギャラリー現（東京）

1997 年「形、場所」モントリオール国際現代アートセンター（カナダ）

1998 年「場所、群馬」北関東造形美術館（前橋、群馬）

1999 年「オープンサークル・プロジェクト」モリス・ギャラリー（東京）

2002 年「サチ子の夢」現代美術センター〈フォ・ムーヴマン〉（メッス、フランス）

2007 年「白川昌生と『フィールド・キャラバン計画』」群馬県庁昭和庁舎（群馬）

2014 年「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ 地域に生きる想像」アーツ前橋（群馬）

2016 年「資本空間 - スリー・ディメンショナル・ロジカル・ピクチャーの彼岸」gallery αM（東京）

「新作彫刻展–Dark Light」ガトーフェスタ ハラダ（群馬）

2017 年「Coyote」Maki Fine Arts（東京）

2018 年「消された記憶」Concept Space（渋川、群馬）

主なグループ展

1990 年「現代彫刻の歩み」神奈川県立県民ホール・ギャラリー（神奈川）

1991 年「箱の世界展」水戸芸術館（茨城）

1993 年「第 2 回北九州ビエンナーレ・クロノスの仮面」北九州市立美術館（福岡）

1994 年 ファーレ立川（東京）

1995 年「第 30 回今日の作家展」横浜市民ギャラリー（神奈川）

1996 年「現代美術と文字」北海道立函館美術館（北海道）

1998 年「そしてつづいて」ラングドック・ルシヨン現代美術センター（セート、フランス）

2000 年「夢のあと」ハウス・アム・ヴァルトゼー（ベルリン、ドイツ）、バーデンバーデン・クンストハーレ（バーデンバーデン、ドイツ）

2002 年「第 7 回北九州ビエンナーレ ART FOR SALE アートと経済の恋愛学」北九州市立美術館（福岡）

2005 年「渋川ぷらっとフォーム計画」渋川市美術館（群馬）

「アルス・ノーヴァ、現代美術と工芸のはざまに」東京都現代美術館（東京）

「ブルーノ・タウトを讃えて」少林山達磨寺洗心亭（高崎、群馬）

「記憶の再生」旧麻屋デパート（前橋、群馬）

2011 年「駅家の木馬祭り」前橋市美術館準備室（群馬）

2012 年「開港都市にいがた 水と土の芸術祭 2012」（小野田賢三らとの《沼垂ラジオ》）（新潟）

2013 年「カゼイロノハナ 未来への対話」アーツ前橋（群馬）

2015 年「引込線 2015」旧所沢市立第 2 学校給食センター（埼玉）

「メルド彫刻の先へ [彫刻と記録]」前橋文化研究所（群馬）

2016 年「あいちトリエンナーレ 2016・虹のキャラヴァンサライ」（名古屋、愛知）

「彫刻の問題」愛知県立芸術大学サテライトギャラリー（名古屋、愛知）

2017 年「シリーズ　ミュージアムとの創造的対話 01　Monument/Document　誰が記憶を所有するのか」鳥取県立博物館（鳥取）

「群馬の美術 2017－地域社会における現代美術の居場所」群馬県立近代美術館（高崎、群馬）

主な著書・共著書

Dada in Japan: japanische Avantgarde 1920-1970 : eine Fotodokumentation, （共著）Kunstmuseum Dusseldorf, 1983.

『日本のダダ 1920-1970』（編著）、風の薔薇、1988 年

『美術、市場、地域通貨をめぐって』水声社 、2001 年

『美術・マイノリティ・実践 もうひとつの公共圏を求めて』水声社 、2005 年
『美術・記憶・生』水声社、2007 年
『美術館・動物園・精神科施設』水声社、2010 年
『西洋美術史を解体する』水声社、2011 年
『贈与としての美術』水声社 水声文庫　2014 年
『彫刻の問題』(共著)、トポフィル、2017 年
『芸術と労働』(共編著)、水声社、2018 年

キュレーター略歴

金井直（かない　ただし）
信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野教授
1968 年生まれ。1999 年京都大学博士（文学）学位取得。豊田市美術館学芸員を経て、2007 年より信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野准教授。2017 年より同教授。ヴェネツィア大学哲学・文化財学科客員研究員（2017-18 年)。主な展覧会企画として「ヴォルフガング・ライプ」(豊田市美術館、2003)「イメージの水位」(豊田市美術館、2004)、「アルテ・ポーヴェラ」(豊田市美術館、2005)、「消失点」(ニューデリー国立近代美術館、2007)、「彫刻の問題」(愛知県立芸術大学サテライトギャラリー、2016) など。あいちトリエンナーレ 2016 キュレーター。主な共著として『彫刻の解剖学』(ありな書房、2010)、『ジョルジョ・モランディの手紙』(みすず書房、2011)、『女性の表象学』(ありな書房、2015)、『自然の鉛筆』(赤々舎、2016) など。

予算案

作品制作費（材料費、機材費、協力謝金）　700 万円
作品輸送費（保険料含）　300 万円
関係者旅費　200 万円
カタログ作成費　400 万円
広報費　300 万円
展示施工費　350 万円
現地管理運営費　1500 万円
通信費　20 万円
その他諸謝金 100 万円
予備費　130 万円
合計　4000 万円

参考作品・展示

《ぷらっとフォーム計画》映像、2005 年

《フィールド・キャラバン計画》映像、2007 年

「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ 地域に生きる想像の力」展示風景、アーツ前橋、2014 年

「消された記憶」展示風景、表参道画廊　2015 年

「資本空間 - スリー・ディメンショナル・ロジカル・ピクチャーの彼岸」展示風景　gallery α M　2016 年

《らくだをつくった男》展示風景、あいちトリエンナーレ 2016、2016 年